

歴史を語る建物たち

秋田編
(第11回)

今日、20世紀型の開発優先社会は終焉を迎え、文化、景観、観光などの側面から歴史的建造物が見直されるようになってきた。平成8年の登録有形文化財制度の発足などは、その象徴である。しかし、一方で、文化財指定を受けていないがその価値は十分にある古い建物が、道路の拡幅などで無造作に壊されていく現状もある。本シリーズでは、文化財指定を受けた有名建造物から、街中にひっそりとたたずむ建物まで幅広くスポットを当て、それらの歴史的経緯やエピソードなどを紹介する。

出羽印刷（横手市）



横手市の中心部、横手市立図書館などが並ぶ通りに、洋風のバルコニーがあるモダンな建物が建っている。正確な記録はないが、大正年間に建てられたと思われる出羽印刷株式会社の社屋である。

当初は新聞社だった

明治25年、横手の漢学者の家に生まれた山崎忠剛が「横手商業新聞」を創刊した。山崎は明治29年、横手町役場（当時）に近い、現在の出羽印刷の場所に本社を移し、明治38年には「羽後新報」と改題した。

昭和16年、戦時体制下で1県1紙が原則化されると、全国で新聞社の統合が強行された。横手では同年12月に3紙が合併して「出羽日報」が創刊された（本社は現在の出羽印刷の建物）が、昭和17年6月には、秋田県内では「秋田魁新報社」を除き、すべての地方紙が廃刊された。

話は変わるが、明治28年、秋田市出身の町田忠治（後の商工大臣、民政党総裁）が東京で「東洋経済新報」（現「週刊東洋経済」）を創刊した。昭和6年には、東洋経済新報の読者サークルともいえる「経済倶楽部」が設立され、その活動は全国に広がり、昭和17年には

「横手経済倶楽部」が設立された。そのメンバーに、出羽日報廃刊後の建物で印刷業を営む石川豊治や、米肥商など数社を経営する松本富之助、羽後銀行（現在の北都銀行）頭取の塩田団平らがいる。

石川の本業は化粧品などを扱う商店であったが、統

創業当時の出羽印刷社章が付いた屋根の石看板は、落下の危険を避けるため現在は外されている。画像提供：出羽印刷



制で商品が思うように入らず、また印刷業も注文が少なく経営に苦しんでいた。そこで石川は、東京での商いの折、東洋経済新報社に立ち寄り、建物（印刷工場）を売却する話をまとめた。当時の東洋経済新報社社長は、後に第55代総理大臣となる石橋湛山であった。湛山は、著書『湛山回想』で「買った時には、せっかくの依頼でもあるし、引き取っておいたら、また何かの役に立つこともあろうぐらいの、ぼんやりとした考えにすぎなかった」と記している。

東洋経済新報の印刷工場として

しかし、湛山の「ぼんやりとした考え」は功を奏することになる。

昭和20年3月10日、東京大空襲によって東京は壊滅的な被害を受け、東洋経済新報も発刊が困難な状況に陥った。そこで湛山は、編集局の一部と印刷工場を横手に疎開することを決意する。石川豊治から買った建物は、東洋経済新報の印刷工場となった。湛山が家族とともに横手に降り立ったのは昭和20年4月末のことである。形式上は横手支局であったが、社長の湛山が来横したことで、実質的には本社機能がほぼ横手に移ることとなった。

湛山は戦時中から一貫して社是である“小日本主義”を貫き、軍部の侵略戦争には反対であり、早期終戦を願っていた。当然、東洋経済新報でもそうした論調の記事が書かれた。保守色が強かった当時の横手において、湛山が批判されることはなかったのだろうか。

『横手時代の石橋湛山』の著書がある、元横手市職員の川越良明さんは「それは無かっただろう」と言う。「湛山は、積極的に現地の多くの人々と接触をし、また地元の人々からも、極めて懇切にいろいろと支援されたことが『石橋湛山日記』からうかがえます」と川越さんは話す。

戦争終結後の昭和20年10月、湛山は東京に戻り、戦後の復興に尽力した。横手支局は翌21年1月に東京へ引き揚げたが、買収した印刷工場は、「横手の文化施設として残しておきたい」という湛山の意志によって地元有志たちに譲渡された。こうして、昭和21年3月、松本富之助を代表取締役とする「出羽印刷株式会社」が発足した。

戦後も続いた湛山との交流

戦後は言論人から政治家として活躍した湛山であったが、横手の人々との交流は生涯続いた。湛山は、松本や石川らのために自筆の書などを贈っている。

代表取締役に就いた松本であったが、事務局を出羽印刷に置いた経済倶楽部の運営に尽力し、湛山を支えた。実質的な印刷所の経営は、元海軍士官で常務取締役の黒澤久次郎が取り仕切った。

2代目松本進（故人）の妻で、現代表取締役の映江さんは、「黒澤さんがいなくなったら会社が続いたかどうか分からないかもしれませんが」と当時を懐かしむ。活



建物2階に保管されている名刺の活版。鉛活字の組み合わせは時間がかかる大変な作業だ。（筆者撮影）

版印刷だけだった工場に、最新のオフセット印刷を導入したのも黒澤だった。

現在ではほとんど使われなくなり、全国的にも姿を消しつつある活版印刷だが、出羽印刷では今も大切に器具を保存している。「これだけ活版印刷の器具が残っているところは珍しいのではないのでしょうか」と映江さん。「ゲーム世代の子どもたちに、アナログの歴史、印刷の歴史を見せたい」と夢を語る。

黒澤はまた、昭和58年に「出羽印刷株式会社社屋建物歴」を書き残しており、今では建物の歴史を知る貴重な資料となっている。

歴史の3点セット「建物、湛山、活版印刷」

“20世紀の日本を代表する言論人”とも称される石橋湛山が、短期間ながら横手に活動拠点を置いていたことは、歴史的にも重要な事実だろう。湛山の孫弟子と自認する田中秀征氏も出羽印刷を訪れている。他にも、東洋経済新報社の社長経験者など関係者はもとより、多くの研究者などが、湛山の足跡をたどって出羽印刷を訪れている。また、平成24年に放映されたNHKのプロジェクト番組『日本人は何をを考えてきたか』（12回シリーズ）でも石橋湛山が取り上げられ、映江さんの息子が3代目の弘氏が案内役を務めた。

映江さんは、「石橋湛山がここで活動していたころの資料には、無くなってしまったものもあります。ただ、今残っているものだけでも、埋もれさせておくよりは、整理して見ていただいた方がいいのではと思います」と語る。

もちろん、建物としての出羽印刷の価値も重要である。数年前、横手市が実測を行ったところ、大正時代の建築から100年近く経っているにもかかわらず、当時とほとんど“ずれ”がなかったそうだ。いかに頑強かつ精緻に造られたかという証拠である。いつ文化財に指定されても不思議ではないだろう。

歴史的建造物（出羽印刷）と歴史的人物（石橋湛山）と歴史的器具（活版印刷）。この“3点セット”が磨かれれば、測り知れぬ輝きを放つに違いない。

（フィデア総合研究所主事研究員・山口泰史）